

チャクンは、まさに国王の側近中の側近です。それ以外のメンバーは、関係省庁の大臣や灌漑局長などの実務家、研究者が並んでいます。このスメートを顧問に迎えることは、対立していたはずのタクシン派と王党派の和解のシグナルです。大洪水を契機として両者の和解が成立したのです。洪水の終盤の11月下旬には、タクシンが国王恩赦を受けて年内に帰国するのではないかとの憶測が報じられました。

■ 大洪水後のインラック政権と王党派の和解は双方にとっての利益に

洪水の原因は、最初に気象予測のミスがあり、その誤った判断を受けて各関係組織が自分たちの役割を果たそうとした。さらにアピシット政権からインラック政権への移行期の政治的空白期間があったことが、対応を遅らせ、事態を悪化させていました。

洪水中の政治状況は、インラック首相にとって非常に困難なものでした。連立パートナー、プアタイ党内、民主党、バンコク都、軍、赤シャツ、住民といった複雑で様々な対立軸が現れ、その狭間に立たされて微妙な舵取りをせざるをえない状況でした。

2011年タイ大洪水がタイ政治に与えたものは、対立していたはずのタクシン派と王党派との和解でした。王党派は、どうしても国民に不人気な民主党から、洪水対策ミスにより人気を落としつつも倒れないインラック政権に乗り換えました。両者の和解は、双方に利益になるものです。2011年総選挙で国民からの不信任をつきつけられた王党派にとっては、インラック政権に寄生することで、自らの権威を再び回復させることができ、他方インラック首相は、王室の権威に寄りかかることで批判を回避することができるだけでなく、兄タクシンの恩赦・帰国の実現への道を開けるのです。

第3セッション コメント

林 行夫

京都大学地域研究統合情報センター

私はタイの研究をしておりますが、仏教をはじめとする宗教について研究しています。このような洪水の話となれば、「なんでこんなことが起こったと了解しているのか」とか、「どのような理解の仕方をしているのか」、「〈天罰〉とみる向きには、どんなふうに語られるのか」とか、そういう方面での関心があります。したがって、先のお二人のご発表のコメントータとしては、もっとも適切な方のご都合がつかず、もっとも不適切な代理として出てきている、ということでお許しください。

■ 2011年大洪水は近年の洪水とどのように違ったのか

今日のお二人のお話をうかがっていて、「やはりそうか」というか、日本の政治もそうですが、タイの政治は宙ぶらりんの状態のような混迷度をもっている。そして今回のこの洪水は、王室も含めてそういう内部状況を露呈した、あらわにしたということだと思いました。

最初に工学的なお話が星川さんによってされました。そして家屋についてのお話がされて、コメントータの柳澤さんが、「結局、自然現象が災害になるのは意思決定の問題であろう」とおっしゃいました。まさに二つの発表は、その意思決定が共通しています。今回のタイの洪水も、原因としては意思決定の問題が大きく左右している。そしてそのなかにはドロドロとした党派関係、権力闘争が連なり、さらに王室もからんでいる。そういう状況が起こった。

しかしながら、いざ洪水が引いていくと、冒頭の西さんの今回のワークショップの趣旨説明にもありましたように、起こってみてあらわになったものが新たな変化を生み出す。その意味では、最後のご説明の王党派との歩み寄り、一つは和解が成立しつつある。そんなお話だったのかなと私は聞きました。

お二人とも、党派というもの、あるいは議員、軍事、そういうものから洪水という現象にスポットライト

をあてて透かし彫りをしてみたというかたちがとてもユニークに見えました。私は途中で聞いているうちに「洪水を起こしたのはやっぱり議員なんや」とか、「やっぱり、だから王様が必要なのだ」とか、そういうことを思ったりしておりました。

政治学の立場からお話ししていただいていたへん勉強になったのですが——これはお二人の発表を越えてですが、今回のタイの洪水が、はたしてどのような「災害」だったのかということが、いまいちこれまでの発表では実感としてわいてこないのです。今回たまたまその場に居あわせなかったというのもあるのですが。

星川さんのご報告にありましたが、近年の大きな洪水は1983年、それから言及されませんでした。1995年も相当な洪水でした。私はその二つには滞在して遭遇しています。最初のときは村のなかで、もう一つはまさにバンコクで遭遇しました。路地にイヌやネズミの死骸がブカブカ泳いでいるなか、裾をまくって歩いてバスに乗ったりして、乗ったとたんハエがたかってくるとか、懐かしい思いがあります。そういう常態化している洪水の話で今回これほど話題をよんだのは、やはり日本の工業団地があるということで日本でも話題性をもち、メディアの攻勢で研究者が苦しむことにもなったのであろうと思います。

天災というものの、「Natural disaster」が「Man-made calamity」、人災に変わる契機のなかに、政治の問題は重要なところを占めていることがわかります。それと同時に、規模が少し違うとは思いますが、ある意味で今回の洪水よりも2004年に起こったスマトラ沖地震でのプーケットの惨状のほうが、もっと社会の亀裂を見せたような気がしてしまいます。それも、いま申しあげましたように2011年の洪水を私はじかに見ておりませんので、そういう印象をもってしまうのです。

■ 一般の人びとは洪水をどう解釈して納得しようとしているのか

やはりこのようなことが起こってしまうと政治の単位が大きな意思決定を示すのですが、同時に知りたいたいの、一般の人びとがそれをどう理解して、解釈して、納得しようとしているかという部分です。2004年のときは「15歳まであなたの子どもをあずかって養育します」という申し出もたくさん出てくるチャリティーのテレビ番組が放映されていたことを憶えていますし、すごいことが起こっているという感じでした。災害そのものよりも、人びとが相互扶助の権化のようになって、みんなを救って助けあう様子が印象に

残っております。

そういうことがまた社会的にあって、一方で個人が亡くなった人をどのように位置づけるかという問題もあります。アチェの場合はそういうことがはっきり出ておりました。今回は死傷者が500人ほどで、それほど大きくはなく、そんなことはメディアには載らなかったのだと感じます。タイ社会では、今回の洪水はいわゆるcalamityという感じではなかったのだなと。むしろお金と利益をめぐる、あるいは党派の権力をめぐる保身劇のほうが突出していたのかと思います。その意味では、非合法労働者の人たちがどのような運命を送ったのかということは興味深く思いました。

■ 洪水が起こったことで、タイと国外との関係はどう変わったのか

二転三転しますが、このような災害が起こったときには、よいことも悪いこともいろいろあります。よく言われるショック・ドクトリンというのか、たとえば2004年のアチェでは、災害が起こったことで、それまで敵対していたグループが和解する。今回はまさに王党派がかつての敵対勢力と和解する。そういうものは比較すると一つ同じものに見えます。

それと同時に、2004年にはスリランカでも同じように対立があって、下からは「いっしょになろう」というものがあつたところに、ドーンとネオ・リベが入ってきて、アメリカ中心でいわゆる真珠の島を観光施設化するということで、そういうことが脇道にそれていった。タイの場合はそういう侵入者扱いをしなかったということを感じるにつけ、タイでこれからは頻発するであろう洪水問題が、いま言ったような外部の動きとともにどのように変わるのか。あるいは今回の洪水でそんな動きがあつたのかということも、もし資料や情報などございましたらお話いただければと思います。

応答

西芳実(司会) とても幅広いコメントで、いくつかポイントがあつたと思います。たとえば今回の災害でタイの政治に変化が起こったとしたらどのようなものなのかといったお話もありましたし、自然災害が人災に変わるプロセスが一方であつたけれども、それは現在のタイだからなのかといったこととの関連でご質問もあつたと思います。

また、社会の一般の人びとの心や世界観のようなものにとって、今回の洪水は災いだったのか、それとも

日常だったのかということに関連するご質問もありました。最後のお話は、災害を契機に外からいろいろな関わりが出てきて、外との関係が問い直されたりすることについて、タイの洪水ではどのようなことがあったのかというお話だったと思います。

■ 日本とタイとの関係は 洪水以前よりも密接に

玉田 最後にまとめていただいた外との関わりという点では、日本との関係がものすごく密接になりました。タイはもう日本に頭が上がらない。日本の経済界から「二度と洪水を起こしてもらいと困る」と厳しく釘をさされていますので、平身低頭、「タイから逃げないでください、タイにもっと来てください」というのがタイ側の姿勢です。従来とくらべると日本側は横柄になっているように見受けられます。タイ側はいま一所懸命ひきとめに躍起になっているという変化は間違いなく大きいと思います。

もう一点、災害が起こった結果、何かよい方向への変化、よい結果が何かなかったかという点に関して言いますと、これはまったく逆ですが、政治がもめていたからこそ、タマサート大学は莫大な保険金を手にしました。同大学の副学長から2012年3月に聞いた話です。どういうことかと申しますと、タマサート大学はキャンパスが王宮のところの一つ、今回完全に水没した北のほうのランシット地域にもう一つの2か所あるのですが、大学全体で損害保険に加入していたのです。

なぜ加入したかという点、タイの政治や社会が赤色と黄色に分かれて対立するなか、タマサート大学は学長が黄色の旗振りをしていましたので、いずれ赤色に襲撃されるのではないかと懸念したからです。学長は公法学者の立場から反タクシン派の行動を正当化する発言を繰り返していました。北のほうのランシット・キャンパスではなく、王宮のすぐ横にあるメイン・キャンパスが襲撃され放火されるおそれがあるというので、年間300万バーツの保険金を払って損害保険に加入した。ですが4年1,200万バーツ払ったところで今回の洪水が起こりました。28億バーツの損害のうちの10億バーツが保険金で返ってきた。

本来ならば保険に入っているはずがないのです。理由は政治だったのですが、結果的にはそのおかげで、かなりの金額を保険でカバーできた。不幸中の幸いというか、政治がもめていたからこそ洪水が起こっても救われた。

ランシット・キャンパスの1階と地下は全部水に浸

かって、電気関係が全部壊れて現在でも病院はきちんと機能していないと聞いております。しかしかなり助かった。ほかになにかよい話があるのかどうか、私はよい話よりも悪い話にしか興味がないものですから、いますぐ出てこないで申しわけありません。

■ タイの民主主義の進展が 災害の拡大をもたらした側面も

水上 私は少しだけよい話を知っています。何かと言いますと、中部地域の工場が各地で被災して、タイ国内のいろいろな物資がなくなりました。そのときに、じつはこんな隠れた商品があちこちにあったのかということに気づきました。とくにチェンマイでは、地元のブランド品とか食べ物、お菓子などがいっぱい出てきた。みんなそれに気づいて、「わざわざ大きいメーカーのものを買う必要がなかった」、「水もブランド品を買う必要はなかったのか」ということに気づいた。そういったことは、地方経済の活性化にとっては、被災地域を除けばそれなりのメリットがあったのかもしれないと思います。

今回の大洪水を見たときに、自然災害が人災に変わるということがよく出てきたのですが、まさにこれは現在のタイの状況だから、このような対立がひどかったのだろうなと思っています。

たとえば、かつてであればプミポン国王というのは神のように権限を固め、力もあり、みんなが言うことを聞く。それこそ民主主義でないタイという状況であれば、王室批判、王室に近い人たちとの対立なども出てこなかったはずですが、現在はタイの民主主義状況がかなり進展している。それこそいまだに不敬罪などの危険もありますが、かなりいろいろなところで自由も出てきている。

これまでであれば、「今回の大洪水で王室が自分たちを守るためにここを犠牲にしたのだ」という文脈は出るはずがなかったのが、現在は出てくるようになっている。ですから、風通しはだいぶよくなってきているのではないかと思います。逆に言うと、そういう対立が出てくるようになったからこそ、あちこちで災害が拡大する面もあったのかと思っています。